

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2023年4月～7月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、4月は離岸傾向で推移する。5月以降は接岸傾向で推移するが、一時的に離岸する。
- ・足摺岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するが、一時的に接岸する。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・蛇行北上部は伊豆諸島海域の西側に位置し、一時的に熊野灘～遠州灘まで近づくことがある。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移するが、一時的に離岸する。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬沖は、黒潮系暖水の影響が大きいが、一時的に冷水に覆われる。
- ・足摺岬～潮岬沖は、冷水域となるものの、黒潮から暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮から暖水が波及しやすい。

(4) 沿岸水温

- ・紀伊水道外域以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「高め」～「極めて高め」で推移するが、一時的に「平年並」となる。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4～6℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2022年12月～2023年3月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が継続した。
- ・ 1月下旬～2月上旬、小蛇行の東進に伴い都井岬～潮岬沖で大きく離岸した。
- ・ 1月上旬～中旬、蛇行北上部が遠州灘に接近した。
- ・ 2月中旬～下旬、冷水渦の接近に伴い房総沖で大きく離岸した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、12月は屋久島南付近の平均的な位置、1月～2月は「接岸」で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、黒潮は接岸傾向で推移したが、12月中旬と1月中旬に一時的に離岸傾向となった。
- ・ 足摺岬沖では、黒潮は12月上旬～1月中旬に「やや離岸」、1月下旬～2月上旬に「かなり離岸」し、2月中旬には再び「やや離岸」となった。
- ・ 室戸岬沖では、黒潮は「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移した。
- ・ 紀伊水道外域では、黒潮北縁から繰り返し暖水が波及した。
- ・ 潮岬沖では、黒潮は「著しく離岸」で推移した。

◎潮岬以東

- ・ 1月下旬、遠州灘において蛇行北上部から小暖水渦が切離し、2月上旬～中旬にかけて遠州灘～熊野灘を通過した。
- ・ 駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。
- ・ 黒潮は、御蔵島付近を北東～東向きに流れた。
- ・ 房総海域では、黒潮は1月上旬～中旬および2月中旬～下旬に離岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響を大きく受けた。

現況 (2023年3月22日現在)

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 室戸岬沖で大きく離岸した後、大王埼沖で $29^{\circ} 30' N$ 付近まで南下している。
- ・ 御前崎沖を北上した後、御蔵島付近を北東に流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎ 薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、「接岸」している。

◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～潮岬沖で「かなり離岸」～「著しく離岸」している。

◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘に、黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。
- ・ 黒潮は、野島埼沖で「接岸」している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮からの暖水に覆われている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

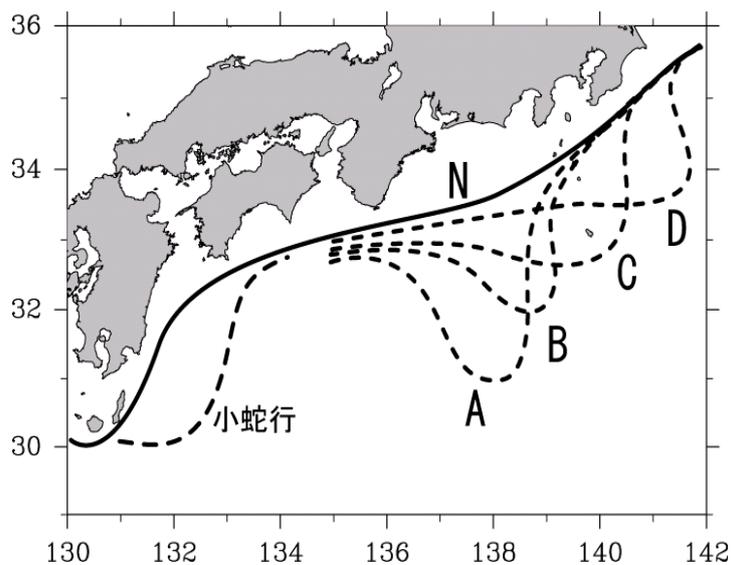


図1 黒潮流型の分類

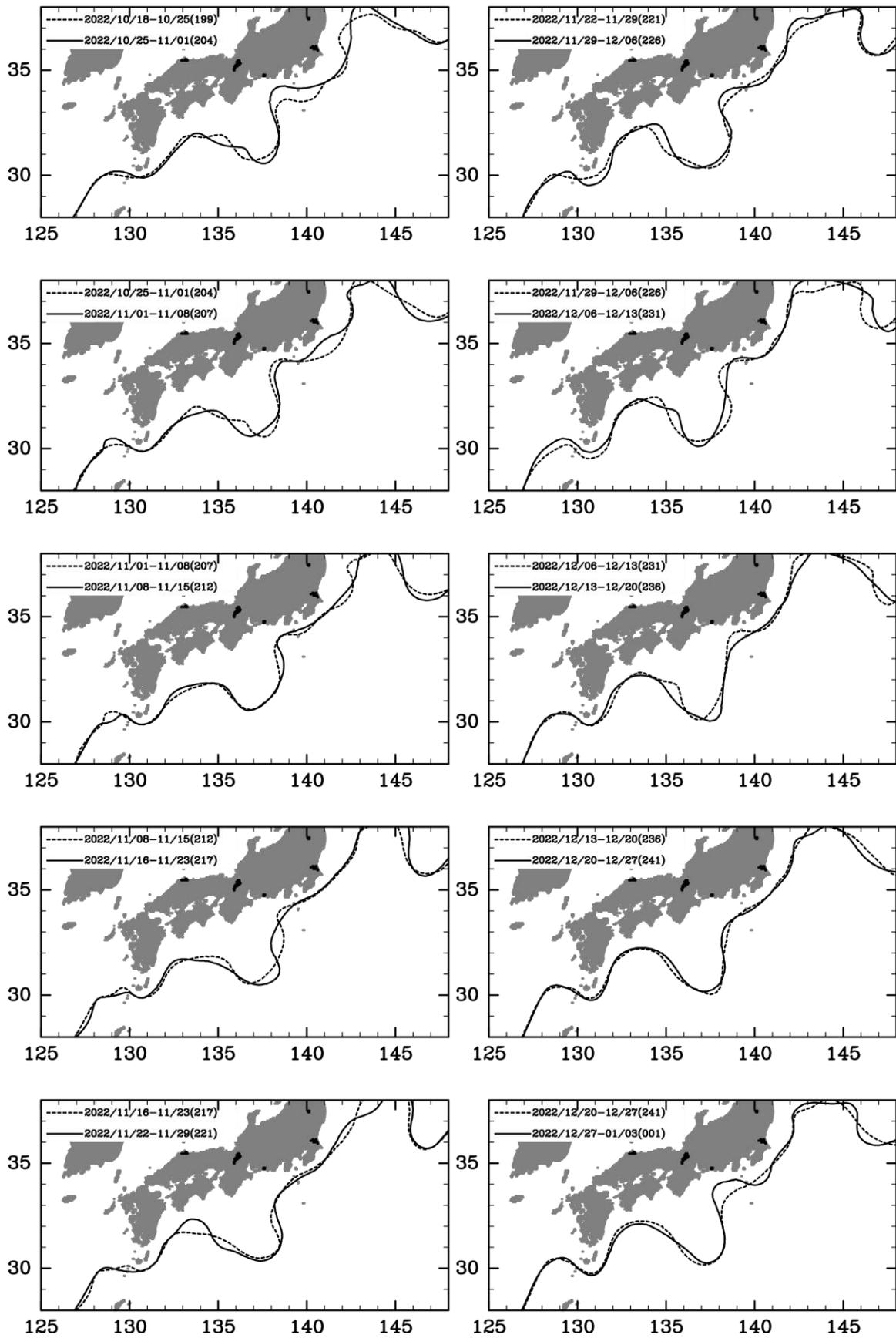


図2 黒潮流軸のパターン

(2022年10月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

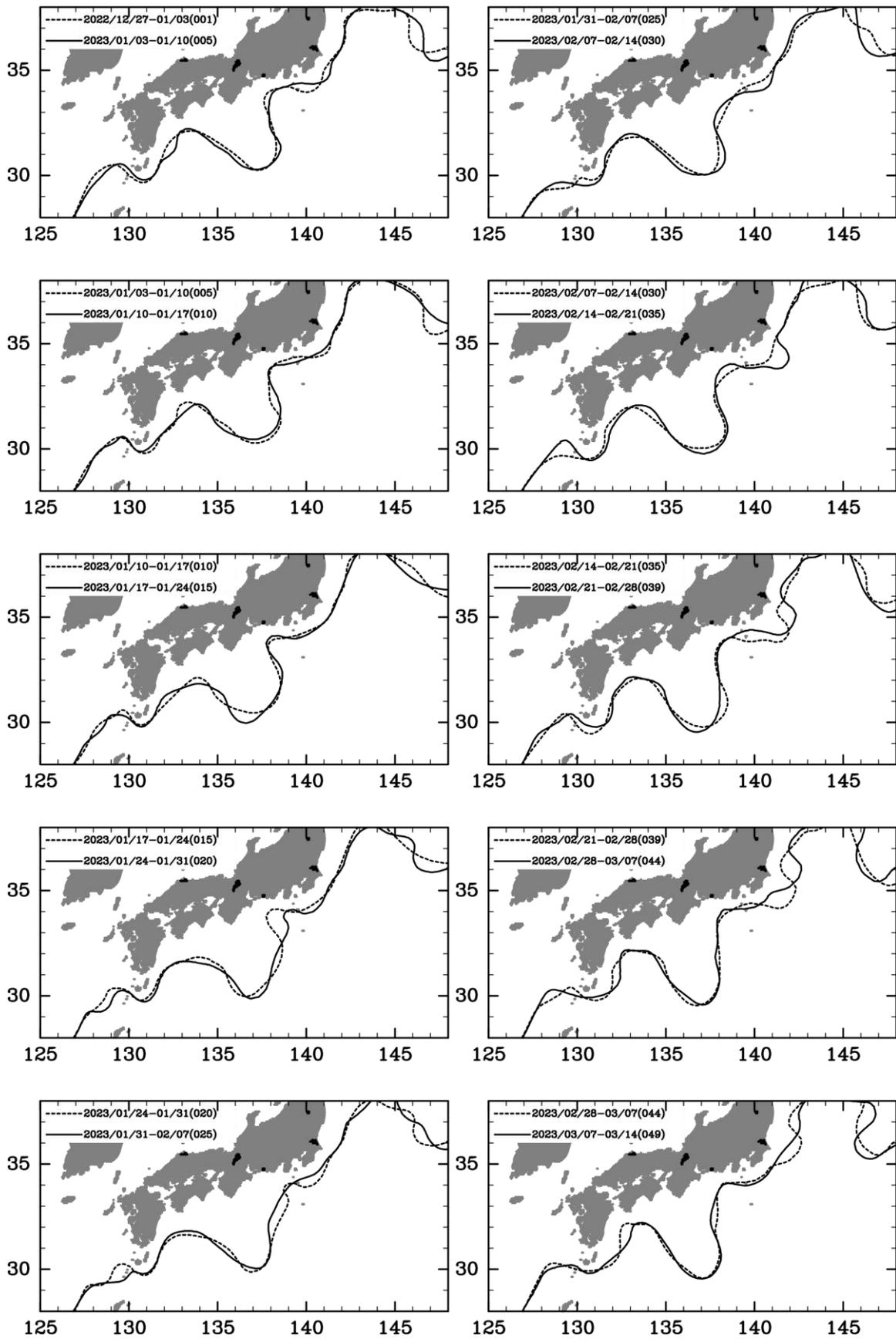


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2023年1月~3月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2023年4月～7月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2023年級群)、1歳魚(2022年級群)、2歳魚(2021年級群)、3歳魚(2020年級群)、4歳以上(2019年級群以上)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を上回る。日向灘～豊後水道南部西側では前年並。豊後水道中南部東側では前年並～下回る。宿毛湾～熊野灘では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～日向灘では、期前半は15cm～18cm前後(1歳以上)、期後半は8cm～12cm前後(0歳魚)主体。豊後水道西側では、10cm前後(0歳魚)主体に、5月以降は15cm前後(1歳魚)が混じる。豊後水道東側では、6cm～10cm前後(0歳魚)主体。宿毛湾～紀伊水道外域では12cm未満(0歳魚)および14cm以上(1歳以上)が漁獲される。熊野灘では14cm以上(1歳以上)主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢・三河湾では前年並。駿河湾～相模湾では前年を下回る。

(2) 漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では7月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では14cm未満(0歳魚)主体。駿河湾、相模湾西部では、14cm未満(0歳魚)主体に、13cm～17cm前後(1歳魚および2歳魚)が混じる。相模湾東部では13cm～17cm前後(1歳魚および2歳魚)主体に、期後半には12cm以下(0歳魚)も漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年並～上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網は、犬吠埼沖～常磐南部海域で漁場が形成され、5月には常磐北部海域、6月には三陸南部海域、6月下旬以降には道東海域でも形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10cm～16cm前後(1歳魚)、13cm～17cm前後(2歳魚)、16cm～20cm前後(3歳魚)、18cm以上(4歳以上)。期後半には房総海域において11cm前後(0歳魚)も漁獲される。

漁況の経過(2022年12月～2023年2月)および見通し(2023年4月～7月)についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。そ

の後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2021 年は 443 万トンと推定された(2022 年度資源評価)。

2019 年級群(4 歳)以上は、最近 10 年(以下、近年)において高い加入量の年級群で構成されている。2022 年における 3 歳以上としての漁獲状況は前年を上回った。4 歳以上の推定残存資源量は前年並〜下回る水準であり、近年の高水準を維持する。

2020 年級群(3 歳魚)は、加入量が 697 億尾と推定されており、2019 年級群を上回る値となっている。2022 年における 2 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2020 年級群の推定残存資源量は、2019 年級群の同時期を上回っている。

2021 年級群(2 歳魚)は、加入量が 617 億尾と推定されており、2020 年級群と同程度の加入水準となっている。2022 年における 1 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2021 年級群の推定残存資源量は、2020 年級群の同時期と同程度である。

2022 年級群(1 歳魚)は、2022 年における 0 歳魚としての漁獲状況(主に西日本海域)は、前年を下回っている。一方、沖合域においては、5 月〜6 月の移行域幼稚魚調査(水産資源研究所)において前年並の CPUE(Catch Per Unit Effort: 単位努力量当たり漁獲量)が見られ、直近の 9 月〜10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査(水産資源研究所)に基づく加入量指数も前年並となった。ただし、6 月〜7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査(水産資源研究所)においては、近年の高水準は維持するが前年を下回る CPUE となった。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の中心であることを踏まえ、2022 年級群の加入量は前年並の水準と考えられる。

2023 年級群(0 歳魚)については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩〜熊野灘(まき網、定置網)

北薩〜熊野灘での 2022 年 12 月〜2023 年 2 月の漁獲量は 0.2 トンと前年同期(62 トン)を下回った。ほとんどの海域において前年を下回る漁獲となっていた。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

・来遊量: 北薩〜薩南海域では、4 月まで 1 歳魚(2022 年級群)、5 月以降は 0 歳魚(2023 年級群)が漁獲の主体となる。本海域において、3 月上旬に長崎県海域からの南下群と考えられる産卵親魚のまとまった漁獲が見られたため、来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

日向灘では、4 月まで 1 歳以上、5 月以降は 0 歳魚が漁獲の主体となる。本海域の上半期の漁獲動向と関係がみられる前年下半期の三重県・高知県・鹿児島県のまき網漁獲量に基づく指標値は前年と同程度であった。また、2023 年 1 月以降、本海域において成魚が漁獲されておらず、今後の成魚および当歳魚の加入も見込めない。以上より、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚が漁獲の主体となり、5 月以降は 1 歳魚が混じる。2023 年 1 月以降、本海域において漁獲が見られず、近隣の海域も同様に漁獲が低調であることから、今後も来遊は期待できない。以上より、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。本海域において、2022 年 12 月〜2023 年 2 月にか

けて、産卵親魚となり得る成魚の漁獲が非常に少なかったことから、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。冬季の土佐湾におけるシラス漁の漁獲状況から、0歳魚の発生は前年を下回って推移している。また、宿毛湾における中型まき網の漁獲状況から、1歳以上の来遊は前年同様に低調である。以上より、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。2023年1月～2月の1そうまき網における漁獲はなく、近年の傾向からすると今期も来遊は見込めない。また、黒潮も引き続き離岸基調で推移すると予測され、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、1歳以上の来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。2月末時点で本海域への産卵親魚の来遊は見られていない。また、沿岸域の1歳魚および2歳魚についても、まとまった漁獲が見られていない。以上より、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～日向灘では、期前半は15 cm～18 cm 前後の1歳以上、期後半は8 cm～12 cm 前後の0歳魚が主体となる。豊後水道南部西側では、10 cm 前後の0歳魚が主体となり、5月以降は15 cm 前後の1歳魚が混じる。豊後水道中南部東側では、6 cm～10 cm の0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、12 cm 未満の0歳魚および14 cm 以上の1歳以上が漁獲される。熊野灘では14 cm 以上の1歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での2022年12月～2023年2月の漁獲量は4,753トンと前年同期（5,974トン）を下回った。伊勢・三河湾および相模湾東部で前年を下回る漁獲が見られ、駿河湾～相模湾西部では前年並となっていた。

・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、0歳魚（2023年級群）が漁獲の主体となる。沿岸回遊群については前年と同程度の来遊は見込めるため、今期の来遊量は前年並と予測される。

駿河湾、相模湾西部では、0歳魚が漁獲の主体となり、1歳魚（2022年級群）および2歳魚（2021年級群）が混じる。2022年12月～2023年2月の相模湾西部における産卵親魚の漁獲状況は好調であった前年並であったが、駿河湾における産卵親魚の漁獲状況は前年を大きく下回った。0歳魚については、2022年12月～2023年1月に本海域においてマシラスが漁獲されていないこと、および産卵親魚が駿河湾以西に来遊していないことから、今後の来遊量は少ないと考えられる。駿河湾でまとまった来遊が見込めないことから、今期の来遊量は、全体としては前年を下回ると予測される。

相模湾東部では、1歳魚および2歳魚主体に、期の後半には0歳魚も漁獲される。本海域における2月までの定置網の漁獲状況は前年を下回って推移している。また、5月以降に来遊する0歳魚の資源水準は現時点では不明であるが、近年の傾向から本海域に来遊する量は少ないと考えられる。以上より、今期の来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

- ・漁期：伊勢・三河湾では7月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、伊勢・三河湾では14 cm未満の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾西部では、14 cm未満の0歳魚が主体となり、13 cm～17 cm前後の1歳魚および2歳魚が混じる。相模湾東部では13 cm～17 cm前後の1歳魚および2歳魚が主体となる。期後半には、12 cm以下の0歳魚も漁獲される。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総以北のまき網での2022年12月～2023年2月の漁獲量は7.1万トンであり、前年同期（6.3万トン）と同程度であった。房総以北の定置網等での2022年12月～2023年2月の漁獲量は2.9万トンであり、前年同期（2.6万トン）と同程度であった。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）主体に4歳以上（2019年級群）が混じる。また、期後半には房総海域沿岸において0歳魚（2023年級群）も漁獲対象となる可能性がある。

資源状態を反映し、2歳以上の来遊量は前年並～上回る高水準になると考えられる。1歳魚の来遊量は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果から前年並と考えられる。0歳魚の来遊量は、現時点では不明だが、産卵親魚の漁獲状況および海況等から前年並の低水準と考えられる。以上より、全体としての来遊量は前年並～上回ると予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。

・漁期・漁場：まき網は、犬吠埼沖～常磐南部海域で漁場が形成され、5月には常磐北部海域、6月には三陸南部海域、6月下旬以降には道東海域でも形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10 cm～16 cm前後、2歳魚は13 cm～17 cm前後、3歳魚は16 cm～20 cm前後、4歳以上は18 cm以上。まき網では、4月は3歳以上が主体となり、6月には1歳以上が漁獲される。また、期後半には房総海域において11 cm前後の0歳魚も漁獲される可能性がある。定置網では1歳魚～4歳魚が主体となる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～7月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～紀伊水道外域、鹿島灘～常磐南部海域では予測が困難。伊勢湾、渥美外海では前年を上回る。遠州灘～駿河湾、相模湾では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域～豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道中南部東側、宿毛湾・土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：4 cm～11 cmの0歳魚、1歳魚主体。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾、駿河湾、相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。伊勢・三河湾では7月以降で、8月以降に本格化。

(3) 魚体：伊勢・三河湾では8 cm以下の0歳魚主体、その他の海域では9 cm～12 cmの1歳魚主体。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域、三陸南部海域では前年並。三陸北部海域ではまとまった漁獲がない。常磐海域、道東海域では予測が困難。

(2) 漁期・漁場：房総海域ではまき網により期を通じて漁獲されるが、散発的。三陸南部海域では定置網により7月以降に漁獲される。

(3) 魚体：9 cm～13 cmの1歳魚主体で、12 cm以上の2歳魚も漁獲される。

漁況の経過（2022年12月～2023年2月）および見通し（2023年4月～7月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、令和4(2022)年度資源評価において、2002年の291万トンを一ピークに減少傾向に転じ、2018年に9.5万トンの最小値となった後、増加に転じて2021年は24.7万トンと推定された。資源動向は親魚量の最近5ヵ年の推移から増加傾向と判断された。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

令和4年度資源評価に基づくと、2021年級群（2歳魚）は加入量が427億尾と推定されており、2020年級群の344億尾を上回った。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2022年の北西太平

洋北上期浮魚類資源調査における推定1歳以上のCPUE（有漁点のCPUE、以下同様）と出現率（全調査点中の有漁点の割合）は前年を下回った。一方、2022年の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（以下、秋季調査）における推定1歳以上のCPUEと出現率は前年と同程度であったものの、2013年以前の水準には回復していない。これらのことから、2021年級群は低水準であると推測される。

2022年級群（1歳魚）は、0歳魚として2022年7月～11月に東海海域を中心に漁獲され、その漁獲量は前年並であった。2022年の秋季調査における推定0歳魚のCPUEは前年を下回り、前年調査のような東経155°以東の分布は認められなかった。一方で、出現率や分布中心は前年と同様であり、三陸北部～道東海域を中心に分布した。これらのことから、2022年級群も低水準と推測される。

2023年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することは困難であるが、1歳以上の親魚量が低水準と推測されることから低水準である可能性が高い。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

- ・来遊量：西薩～紀伊水道外域では、シラスの来遊量については予測が困難である。

伊勢湾、渥美外海では、期を通じて漁獲され、5月以降本格化する。カタクチイワシ太平洋系群の資源量は低水準であること、マイワシ親魚の西日本への回遊も少ないことから、シラスは前年に比べて急増するとは考えにくい。2023年も黒潮大蛇行がA型基調で継続し、不安定な海況が続くことが予測され、外海での漁場形成時期が遅れる可能性が引き続きある。よって外海由来の来遊は前年並と考えられる。一方で、近年の内湾の産卵水準は高い。2022年は環境に恵まれず、シラスの生残が極めて悪かったが、2023年はそれよりは上向き、内湾由来の来遊は前年を上回ると予測される。総じて今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

遠州灘～駿河湾では、近年、マシラスは期前半（3月～5月）に漁獲されており、三重県熊野灘のまき網において2月～3月のマイワシ水揚量が多い年は、3月～5月のマシラス水揚量が多い傾向がある。2023年2月～3月は熊野灘でマイワシの漁獲がほとんどなく、産卵親魚が熊野灘まで南下回遊していないと考えられるため、マシラスは低調であった前年並と予測される。カタクチシラス水揚量は、シラスの補給源となる静岡県以西の黒潮上流域における親魚量の影響を受けると考えられる。静岡県以西のカタクチイワシ親魚の水揚量は前年同様に低調であることから、カタクチシラスは低調であった前年並と予測される。近年、黒潮流路が遠州灘に接近すると不漁となる傾向であるが、4月以降は前年と同様に黒潮流路が遠州灘に近づくと予測されている。以上のことから、シラス全体としての今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾では、今期の漁獲物は、湾外で発生したカタクチシラスが主体と予測される。前年同期の標本船3隻によるシラス漁獲量は36.5トンと平年（過去5年平均、30.6トン）並であった。親魚資源であるカタクチイワシ太平洋系群の資源水準は依然低水準であり、また黒潮流路も前年同様A型が継続すると予測されることから、今期の来遊水準も前年、平年と大きく変わらないと考えられる。そのため、今期の来遊量は前年並と予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、近年のカタクチイワシの春の産卵盛期は4月～5月で、盛漁期は6月～7月

となる傾向がある。期前半（4月～5月）の海況は黒潮からの影響を受けてシラスの生息に適した暖かい海になると予測しているが、盛漁期の期後半（6月～7月）の海況は現時点では予測が困難であることから、来遊量の予測は困難である。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、今期の漁獲主体となる1歳魚（2022年級群）は、2022年12月以降低調な漁が続いており、周辺海域のシラス秋漁についても低調な漁模様が続いていることから、今期の来遊量は低調であった前年を下回ると予測される。なお、期の後半に漁獲される0歳魚（2023年級群）については、現時点での予測は困難である。

日向灘では、2月～5月は、足摺岬以東由来と考えられる大型成魚群の来遊が漁獲の好不調を左右し、夏秋季は、被鱗体長10cm～11cm台主体の沿岸加入群が漁獲の主体となる。近年、大型成魚の来遊はほとんどみられず、今期も漁獲の主体となる可能性は低い。沿岸加入群の漁獲動向は、前年10月～12月の宿毛湾まき網漁獲量（銘柄：ドロ～タレ）と宮崎県シラス漁獲量（前年8月～12月）の相乗平均値を指標値として予測しており、2022年12月の時点で指標値が前年を下回っていたため、沿岸加入群の来遊は前年を下回ると予測される。2022年12月以降カタクチイワシの漁獲はなく、2022年12月～2023年2月のシラス漁獲量が前年を下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、例年、4月～6月は0歳魚を主体に1歳魚が混じる。2022年のカタクチイワシ漁獲量は平年（1986年～2021年の平均）を大きく下回るとともに、2022年12月～2023年2月は水揚げがなかったことから、3月以降も引き続き低調で推移する可能性が高い。よって、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、今期は0歳魚、1歳魚が主体となる。0歳魚の予測は難しいが、2022年12月～2023年2月にかけて0歳魚主体の漁獲量が前年同期を下回り、2022年6月の漁獲量が好調であったことを考慮すると、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、4月～7月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月～12月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計の間には、弱い正の関係が見られる。この関係から、4月～7月の中型まき網の漁獲量は279トンと推定され、前年同期の漁獲量が576トンであることから、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：4cm～11cmの0歳魚、1歳魚主体。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、冬季に来遊する魚群は、前年夏秋季の漁獲対象とは異なり、黒潮親潮移行域から大規模回遊を行う群れと考えられ、漁獲動向も前年の熊野灘とは連動しない。2022年の秋季調査によると、秋季に沖合に分布するカタクチイワシの資源量は低い水準にあると判断されることから、まとまった来遊

は見込めないと予測される。ただし、2月下旬には南下群の来遊が示唆されたため、これらの魚群が熊野灘沿岸に滞留するならば今期も少量ながら漁獲の可能性はある。

伊勢・三河湾では、カタクチイワシ太平洋系群の資源状態が低水準であるため、外海および内湾への来遊量の急増は見込めないが、前年に引き続き、漁期開始を遅らせて主たる漁獲対象である0歳魚（2023年級群）の大型化を図ることで前年並の漁獲量が見込める。これらのことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

駿河湾、相模湾西部では、相模湾西部の定置網による他魚種に混ざっての漁獲が主体であり、漁獲対象となる1歳魚（2022年級群）の資源水準は、前年に引き続き非常に低水準と推定されていることから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮A型流路が継続した2018年以降における相模湾主要定置網の3月～7月の漁獲量は、2017年以前と比べ明瞭に低下している（2018年～2022年平均18.7トン、2013年～2017年平均147.2トン）。今期も黒潮流路はA型が継続すると予測されることから、不漁傾向も継続するものと考えられる。さらに12月～2月の主要定置漁獲量が極めて低調に推移していることから、今期の漁獲量は前年の水準に達しない可能性もある。以上のことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。伊勢・三河湾では7月以降で、8月以降に本格化する。
- ・魚体：伊勢・三河湾では8cm以下の0歳魚主体、駿河湾～相模湾では9cm～12cmの1歳魚主体に漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総・常磐海域では、例年、2歳魚主体の大型魚と1歳魚主体の小型魚が漁獲対象となる。前年11月～12月0歳魚と1月～6月1歳魚の漁獲量合計値と、11月～12月1歳魚と翌年1月～6月2歳魚の漁獲量合計値が正の関係にあることから、前年漁期の小型魚が翌年に大型魚となって再来遊すると考えられている。2021年11月～2022年6月漁期の房総・常磐海域における小型魚（2021年級群主体）の漁獲量は、前年同期並の低水準であることから、大型魚は今期の漁獲主体とはならない。房総沿岸域における1歳魚（2022年級群）は、1月～2月は極めて低調に推移したものの、3月以降、中型2そうまき網や定置網で前年並の漁獲がみられている。また、三重県外湾まき網でも2月下旬以降、漁獲が継続していることから、北上期にあたる今期の来遊量は低調だった前年並と予測される。常磐沿岸域においては、前年の漁獲量が少なく、水揚げもないため、今期の来遊量は予測が困難である。

三陸南部海域～仙台湾では、これまでの漁況経過からは前年を下回ると予測されるが、北上暖水が強勢であることによって沿岸への来遊が早まることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

三陸北部海域では、漁業情報から、まとまった漁獲がない。

道東海域では、釧路水産試験場が実施した2021年および2022年の調査船調査の結果から、当該海域におけるカタクチイワシの来遊量が増加傾向にあると考えられるため、今期に道東海域に来遊する可能性はある。一方、マイワシの来遊は中水準で前年と同程度と考えられることから、まき網船はカタクチイワシではなくマイワシを対象とした漁獲を行うと考えられる。したがって、今期にカタクチイワシを対象とした漁獲が行われる可能性は低い。

- ・漁期・漁場：房総海域ではまき網により期を通じて漁獲されるが、散発的。三陸南部海域では定置網により7月以降に漁獲される。
- ・魚体：9 cm～13 cmの1歳魚主体で、12 cm以上の2歳魚も漁獲される。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関)
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	